

優秀賞



前だけを見て

青森県平川市立尾上中学校

二年 佐藤 那実

苦しい。息が出来ない。足が動かない。

二年生になって初めてのの中体連を一カ月後に控えた夏。走っても走っても速くならない自分がいた。雪解けとともにどんどん強くなっていく仲間たち。どんどん差をつけられていく私。朝練を増やし、体重も落とし、体幹も鍛えた。誰よりも努力しなければ勝てないのに、誰よりも必死にならなければおいていられるのに、走れば走るほど遅くなる自分が憎らしかつた。楽しそうに部活をしている友達を見るたび、胸の奥がぎゅっと苦しくなって、声を出せなかった。焦りと嫉妬が私の心をむしばんだ。何かがおかしい。病院に行って医師から言われたのは、原因不明の貧血。赤血球も白血球も正常値を大きく下回り、ヘモグロビンは半分以下になっていた。

「体が悲鳴をあげています。今の体は、全身が酸欠状態で心臓にも負担がかかっているので、行動を制限しなければなりません。部活はもちろんドクターストップです。安静にしてください。」

私の手から全て落ちていった気がした。今まで練習に費やした時間、走るたびに積み重ねてきた悔しさ。どうしようもない脱力感だけが残った私は、無

気力な毎日を淡々と過ごした。家族や友達からの励ましの言葉さえ、私の耳には届かなかつた。

そんなとき、一時は生死をさまよい、今も病氣と闘い続けている祖母が突然、公園に行きたいと言い出した。

「大丈夫。体の調子もいいし、外も暖かくなってきたし、少しだけだから。」

休日の朝早く、祖母を車いすに乗せ、家族みんなで行った公園に行った。朝の空気のせいか、心が軽く感じられた。車いすの祖母も、いつにない笑顔でたくさん写真を撮りたがった。

「わい、良い写真じゃ。ありがとう。」
撮った写真を見せるたび、祖母はそう言って、にっこり笑った。

みんなが飲み物を買に行ったとき、あまり動けない私と祖母は、大きな桜の木の下で涼んでいた。祖母はまた笑顔で、

「外は気持ちいいね。なっちゃんが車いす押ししてくれて助かったよ。おかげで、何年かぶりにお散歩出来た。」

祖母はもともと体が弱い人だったが、三年前に倒れてからは、車いす生活を余儀なくされ、入退院を繰り返して、何度も生と死の狭間をさまよった。今も週四日は病院に通い、誰よりも必死に生きている人だと思ふ。しかし、祖母のすごさはそれだけではない。不自由な体で医師から無理だと言われても、立つ練習をしたり、歩く練習をしたりリハビリを続けている。そして、自分のなかに残っている機能をフルにつかい、私たちのために料理を作ったりする。祖母は自らの命をつないでいる薬の影響で、体を少しぶつけただけで青あざができてしまう。不可能なことを可能に変えようとすると祖母の、途絶えることのない青あざは、祖母が必死に生きている勲章だ。

そして祖母は毎日決まってくう言った。

「今度はあれがしたいね。楽しみたいじゃ。」

私の中の祖母は、努力の天才でありながら、次から次へと希望や夢があふれる、天真爛漫な少女だった。その祖母が私の手を握り、優しく語りかける。

「なっちゃんと一緒に行きたいところも、なっちゃんと一緒にやりたいことも、たぶんなっちゃんよりいっぱいあるけれど、ばあちゃんはいっぱい生きてきたから、来年は分らない。でも、なっちゃんはまだまだ時間あるでしょ？ やりたいことなんでも出来るべ？ なんでもやってみへ？ だめならやめればいっきゃ。新しいことやればいっきゃ。ばあちゃん応援してるから。なっちゃんが楽しいばあちゃんも楽しいから。」

私は、のどの奥がぎゅっとなった。風で落ちる緑の葉っぱにつられて、今まで我慢していた涙があふれた。苦しいと言えなかった自分に気づいた。未来にたくさん自分の時間があるのに、すぐに諦めてしまった自分が申し訳なくて、祖母に心配させてしまった自分が情けなくて、涙が止まらなかった。

細く、小さく、でも力強い祖母の手から、誰よりも必死に生きる祖母の言葉から、大きな勇気と希望をもらった。

今でも、私は病氣と闘っている。病気のせいで、やれないこともたくさんある。でも、あの日、祖母からももらった言葉と、祖母が私たちに見せてくれる力強い生き方は、今も私を支えている。私は変わりたい。出来ないことを悲しんで生きているのではなく、祖母のように今出来ることに感謝して、全力で頑張れるような生き方がしたい。どんなに苦しくても希望を捨てず、夢を追いつけていたい。私の背中を祖母が押ししてくれている。だから、今日も、私は前を見て生きる。力強く、一歩、一歩、前だけを見て。